

岡本かの子の小説作品にみる動物

柴崎達裕

芸術文化キュレーションコース

文学研究

序論 研究目的

岡本かの子は大正、昭和前期に活躍した作家である。本論文の目的は、かの子の小説作品のなかの「動物」に着目し、そこに何を読み取ることができるのかを明らかにすること、また、吉本隆明が述べる、かの子文学に含まれているという「生命の糸」(引用1)の具体化を試みることの二点である。

第一章 肯定的姿勢

第一節では、かの子の歌・随筆から、かの子の「動物」に対する肯定的姿勢を確認した。かの子の「動物」に対する愛情は、身近な「動物」だけに注がれるのではなく、随筆「初秋の母の感懐」にみられるように、「生物の全部」に向けられていることが分かった。第二節では作品「家霊」、「鮎」を取り上げ、作品に描かれる「どぜう汁」、「鮎」に着目することで、「食」というかたちになった「動物」を考察した。それら「どぜう汁」、「鮎」は、人物の“いのちのコミュニケーション”を仲介する重要な役割を担っていることが明らかになった。

第二章 魚

第一節では、かの子についての研究動向を整理することで、最近ではかの子の個性的な作風を「女性の人生における多様な選択肢を考えさせ得る」(引用2)ものとして評価する傾向があることが分かった。第二節では、作品「晩春」、「金魚撩亂」の二つの作品を、「性」という視点から考察した。それらの作品のなかで、主人公となる人物は、精神の深層に潜む原動力としての「性」について葛藤している様子で描かれており、そして「魚」にその解消をみていることが明らかとなった。第三節では、「金魚撩亂」の結末部に焦点を当てた。一部の先行研究においてこの作品の結末は、「家父長制崩壊のアレゴリー」としての解釈が為されている。だが、一見「女性」の「解放」として読める部分も、注意深くみると「男性の封建的な男性性からの解放」としても解釈することができる。このような解釈も可能なことから、かの子は性別によらず、一つの「いのち」に対して「解放」の示唆を与えていると推察することができるのである。

第三章 「いのち」の関わり合い ―「蝙蝠」を読む―

第三章Iでは、かの子の小説作品のなかの「動物」と「人間」の境界について、宮沢賢治の作品と比較しながら考察した。他の生き物の「いのち」を食べることを、宮沢賢治は「醜い業」と捉えるのに対して、かの子は「コミュニケーションの一環」として捉えており、かの子のなかで「動物」と「人間」の距離は近

く、また親和性の高いものであることが明らかとなった。その点を踏まえ、IIでは、作品「蝙蝠」を読み解いた。作品のなかで「動物」は、「人間」の精神に影響を与える存在であり、またその影響は一時的なものではなく、物語終盤まで持続していることから、いわば“人間が蝙蝠に飼われている”とも言うことができる。このような「動物」が「人間」の精神に干渉するという構造に、「動物」と「人間」の境界の非具体性が現れているのである。

第四章 「動物」が現れない作品の「動物的」読み

第四章Iでは、「動物」が表れない作品「快走」に焦点を当て、「動物」が現れる作品との共通点を見つけることで、「動物性」を発見することを試みた。「快走」のなかで、「動物性」は、主人公が「走る」という行為を通して没入する「世界」や、主人公の衝動的な精神の「変化」、あるいは主人公のその変化に呼応し、他の人物の内面にも変化が生じるというその「連鎖性」から読み取ることができる。このように「動物」が現れない作品のなかにも「動物性」が潜んでいることから、「動物」が現れる作品の特徴である「いのち」の「抑圧」と「解放」は、かの子作品全体の主題ではないかと推察された。

結論

これまでの章を踏まえると、岡本かの子の小説作品のなかの「動物」は、人物の「解放」の象徴であると考えることができ

る。そして人物を「抑圧」している原因の根底にあるものは、精神の深層にある「性」である。つまり、吉本が「生命の糸」という漠然とした言葉を用いたのは、岡本文学が既存の言葉では語り切れない、底知れぬ原動力である「性」を内包しているしるしであるのだ。したがって、かの子作品の主題とした「抑圧」と「解放」を加味すると、吉本の言う「生命の糸」とは、精神の深層にある「性」の「解放」の現れであると考えられるのである。

岡本かの子が「動物」を「解放」の象徴として描いた背景には、やはりかの子が「動物」に対して肯定的な姿勢をもっていたからであると推察できる。そして、そうした「性」や「いのち」の「解放」という普遍的テーマを内包しているからこそ、岡本文学は現代でも盛んに再評価が試みられているのだ。

[参考文献、引用文献、URL]

引用1) 吉本隆明／「岡本かの子」、『吉本隆明の183の講演』／1989／https://www.1101.com/yoshimoto_voice/-speech/text-a117.html(2019/10/26時点)

引用2) 小松史生子／「岡本かの子――恍惚の三昧境で性を超える」、『女学生とジェンダー 女性教養誌『むらさき』を鏡として』／今井久代・中野貴文・和田博文編／笠間書院／2019／p360

現代いまを生きるゾンビたち

2010年代ゾンビ映画研究

林美伶

芸術文化キュレーションコース

映像文化

はじめに 研究背景と本論文の目的

ゾンビ映画と呼ばれる作品群がある。世界初のゾンビ映画と言われる作品の公開から現在に至るまでの約90年もの間、ゾンビ映画はその特徴を受け継ぎながら様々な形で制作され続けている。公開本数が劇的に増加した2000年代からの「ゾンビ映画ブーム」は、2010年代においても衰えることなく、数々の話題作やヒット作を生んだ。そして、2010年代に公開された作品には、ヒット作であるか否かに関わらず、これまでのゾンビ映画作品とは異なる特徴が見られる。

本論文の目的は、2010年代ゾンビ映画ブームにおける新たな動向と変化がどのようなものであるのかを同時代的に明らかにすることである。そのため本論文では、ジャンルにおいての新たな視点や表現等が見られる2010年代の作品を約20点取り上げ、ゾンビ映画の歴史やその典型的な特徴と照らし合わせながら、変化が捉えられる点について、「人間ドラマ」、「ロマンス」、「笑い」、「進化」という4つの観点から考察を行った。

第1章 ゾンビとは何か

ゾンビ映画とは、「吸血鬼やミイラ男などのモンスターに分類できない、何らかの理由で蘇った実態を伴う死者、あるいは一般的なゾンビのイメージに近い催眠・錯乱状態にある人々が登場する映画」(引用1)として広義に捉えられる。世界初と言われるゾンビ映画は、集中的にホラー映画が製作された1930年代初頭に生まれた。ゾンビは、「フランケンシュタインの怪物」や「ドラキュラ」に次ぐ新たな怪物として映画界に登場した。つまり、ゾンビ映画はホラー映画と深い関係を持って制作されてきたのである。そして、ゾンビ映画におけるゾンビは、1930年代から2000年代にかけて、「人間に使役される他律的なゾンビ」、「自立的に人間を襲い増殖するゾンビ」、「走って人間に襲い掛かるさらに凶暴性を増したゾンビ」というような変遷を経ている(参考1)。時代と共に変化してきたゾンビ映画はこの後どのように展開していくのだろうか。第2章で詳しく分析した。

第2章 2010年代ゾンビ映画の進化

第1節では、「人間ドラマを描くこと」を主軸にした2010年代ゾンビ映画を取り上げた。そのような作品は、人物の心情を繊細に描くことで物語世界へのさらなる没入を可能にし、また、見る者の心身の限界を超えた疑似体験を可能にしている。さらに、ゾンビ側の人物を主人公に据え、ドラマチックな物語を描くことで人間の敵としてのこれまでのゾンビに新

たな視点と概念を示している。ゾンビは、人間を危機的状況に追い込み、その本質を顕在化させる役割を担っている。

第2節では、ゾンビ・ロマンスというゾンビ映画の新基軸について分析した結果、そのような作品に登場するゾンビには、ロマンス映画のヒーローたる資質が認められた。また、ゾンビと人間の恋愛物語は、圧倒的な「他者」を受け入れるという点において、異文化理解や差別問題への強いメッセージを含むことが可能である。

第3節では、2010年代ゾンビ映画を「笑い」という観点から考察した。この年代の作品には、笑いの対象としての愚鈍なゾンビの表現を引き継ぎながら、凶暴的な側面をも笑いに変える演出が見られた。作中に見られるパロディやオマージュは皮肉や風刺を含み、ウィットやユーモアによる笑いの演出は、他作品によって形成された固定概念を覆すと共に、他作品への切り返しの手段として機能している。ゾンビ映画における笑いは、死や恐怖など深刻な状況を描くゾンビ映画の娯楽性を高める役割を持つ一方で、映画として観る者に伝えるべきメッセージやテーマを内包している。

第4節では、2010年代ゾンビ映画を「進化」という観点から考察し、ゾンビ映画が描くゾンビと人間の関係性に変化が見られることを明らかにした。本節で取り上げた作品には、人間という制限から解放された存在であるという、ゾンビへの肯定的な視点が見られ、このような視点は、2010年代ゾンビ映画の一つの特徴として挙げられる。

おわりに

2010年代ゾンビ映画においては、思考能力や感情を持った「個」としてのゾンビの表現が見られ、本論文ではこれを“インディビジュアルゾンビ”と呼ぶことにした。主人公として感情移入の対象ともされ得る“インディビジュアルゾンビ”は、ゾンビ映画というジャンルにおいて新たな物語展開を可能にする。さらに、2010年代ゾンビ映画は、人間の生きる姿に焦点を当てた物語を描くことで、人間という存在を問う側面も持つ。これらの作品は、表面的な残酷性以上に読み取るべき主張やテーマを含み、映画作品として多様な価値を持っているのである。総じて、本論で考察した作品は、ゾンビ映画、あるいはゾンビというものに新たな概念や視点を与え、ゾンビ映画というジャンルの多様性を高めている。よって、2010年代ゾンビ映画は、ジャンルのさらなる進化を示すものであると言える。

[参考文献、引用文献]

引用1)伊東美和/『ゾンビ映画大辞典』/洋泉社/2003/p8
参考1)福田安佐子/「ゾンビ映画史再考」、『人間・環境学』第25巻/京都大学大学院人間・環境学研究科/2016/p55-6